

山本博士
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和九年一月一日發行

經濟論叢

第三十八卷第一號

(通卷第二百二十三號。禁轉載)

奉
呈

山本美越乃先生

執筆者一同

目 次

<p>尙書の虞夏書に見はれたる經濟思想</p> <p>酒の專賣に就きて</p> <p>マールクスの認識論原理</p> <p>植民の世界史的意義</p> <p>農業生産<small>に於ける</small>水平的分化と垂直的分化</p> <p>我國工業<small>に於ける</small>小企業の殘存<small>に關する</small>一研究</p> <p>資本蓄積率の差異と固定資本</p> <p>中央銀行兌換準備檢討</p> <p>貨幣需要と貨幣の流通速度</p> <p>植民地時代米國の土地保有制度</p> <p>米國の對玖馬投資とその影響</p>	<p>法學博士 田島 錦治 一</p> <p>法學博士 神戶 正雄 二四</p> <p>文學博士 米田庄太郎 四四</p> <p>文學博士 高田 保馬 五三</p> <p>經濟學士 八木芳之助 八三</p> <p>經濟學士 大塚 一朗 一〇七</p> <p>經濟學士 柴 田 敬 一三三</p> <p>經濟學士 松岡 孝兒 一六〇</p> <p>經濟學士 中 谷 實 一六六</p> <p>經濟學士 堀江 保藏 一八九</p> <p>經濟學士 長田 三郎 二二七</p>
--	---

免稅點以下の小額所得者	經濟學博士	汐見 三郎	二四〇
經營學の基礎概念たる資本、企業及經營	經濟學博士	小島昌太郎	二六〇
世界科學に就て	經濟學博士	作田 莊一	二七六
漁村更生策に於ける問題	經濟學士	蜷川 虎三	二九五
人口粗密の原因觀	法學博士	財部 靜治	三二五
徳川時代における植民的思想	經濟學博士	本庄榮治郎	三三九
ヘーゲル市民社會論と經濟學	經濟學博士	石川 興二	三四九
恐慌と蓄積と植民	經濟學博士	谷口 吉彦	三六九
北海道鯨漁業に現存の漁場貸借關係	經濟學士	岡本 清造	三九四
我國に於ける植民政策學の發達	經濟學士	金持 一郎	四二七
クレルツキアに就いて	農 學 士	若木 禮	四四〇
山本美越乃博士年譜及著書論文目錄	經濟學士	高木 眞助	四五七

人口粗密の原因観

財 部 靜 治

一

「一日月晝夜回轉照^ツ四天下、名^ニ一國土積^ニ一千ノ國土、名^ニ小千世界、積^ニ千箇小界、名^ニ中千世界、積^ニ一千ノ中千界、名^ニ大千界、以^レ三積^レ千、故名^ニ三千大千世界」(起世因本經)とは、四洲の地心が即ち須彌山なりとして考へられたる地球觀なり、之に對し世界大戰前歐露 (Gouvernement Archangel) に於ける一方料當り人口〇・五人、然るに一九三〇年東京府に於ける同一計算歩合二、五二人なりとは、輓近發達せる統計により輿地を觀するの一落葉なり、看る可し統計に所謂人口密度の研究により坤輿を大觀するの一路あるを。

二

人口を觀念しつつ之を地域的 (地^デ方^カレ) 人口 Territoriale Bevölkerung 及社會的人口 Soziale Bevölkerung に二別して考ふるは、強ひてその必要を見ずとすべきも一便法視し得べき所なり、その意を敷衍すれば、人口を之により住まれたる地域との關聯上、その住居聚離の模様を之に結付けて考察し從ひて寧ろその純外界的分布に就きて考察する際前者あり、世間を組成する人口の

本質、その内部構成、共同生活の仕組及社會的諸類別に主眼をそそぎ研究するは、狹義社會研究の範圍に歸すべく、之を社會的人口統計てふ總稱下に包括するも一便法たるべし、詳言すればかかる社會的人口統計論は各人各別なる諸特徴の特異に察知の立脚點を求めつつ、一つ一つの共同體に結束されたる群衆の同風又異風に關する一事相を描き、社會渾一體そのものを様々なる方面に向ひ、統計的に探照せんことを期す、素より地域的人口統計の見地を探ると謂ふも、目指すべき本領は地學の如く地そのものたらず、寧ろ右の社會的諸元素を指示することにも、深く關心すべきや謂ふ迄もなし、これ右二分を以て敢て明截の區別視せず一便法視する所以なり¹⁾。

三

前項説く所により推して考ふるに、人口の研究が社會諸學特に社會學により重んぜらるべき一面たると共に、地學特に人文地學又は政治地學の立場よりするも、重大視さるる一面たり、而も亦兩者が之を觀想するの主眼點自からその選を異にすべきや、察するに餘りあり。

右の趣旨を先づ社會學に徴するため、一例として Ross の社會學に就きて看るに、劈頭の三章及末段の數頁を費やし人口を取扱ふも、人口と地との關聯問題視すべき人口密度を問はず、社會的觀點主たり、即ち(1)人口の構成(就中「民衆の生國雜多により社會精神に及ぼす影響」を、その一小目として掲ぐるを想へ)(2)都鄙別(中に「都市精神及田野精神」の一小目を含む)(3)人口の増加は、前記三章の題目とせらるる所なり²⁾。之に對し近年特に夥しき著書を生める文化及政治地理中、單にその一例を引く

1) Cf. H. Bleicher, Statistik. I. 1915 SS. 75, 76; Ditto. 2. A. 1925, SS. 88, 89.
2) Cf. E. A. Ross, The Principles of Sociology, 1920, pp. 3-37.

の意により Reinhard の「世界經濟及政治地誌」を繙くに、その「政治地誌汎論」一名「地理的國誌」中先づ地の人口を問ひ、就中地の人口計數及人口密度に付汎言せる後國家の外界的諸特徴てふ題目に移り、その諸細目の一として人口の多寡別を問ひ、列國大小強弱別の第二基準を（その第一は土地の廣狹）之に訴へつつ一九二五年前後の現勢により、人口一億以上なる一等大國五、人口一二百萬のユーゴースラウイアを最小國として抜ける二等大國一四の人口計數及人口密度（方籽當り殖民地合算及本國に二別しつゝ）を概括して掲げたる一表に據り、更に抄略を加へて得たる一表左の如し。

國名	調査年次	人口密度 殖民地合算*	同上本國
大英帝國	(一九二五)	一三	一八〇
支那	(一九二五)	三九	—
ソウイェット露	(一九二六)	六・七	二〇
北米合衆國	(一九二五)	一二	一三・五
佛蘭西	(一九二六)	七・二	七三
日本	(一九二五)	一二四	一五七
獨逸	(一九二五)	一三四	—
和蘭	(一九二五)	二八	二一一
伊太利	(一九二五)	一六	一三一

備考 *「殖民地」として概示せるも稱呼及統治組織は國々により、相違甚だしきを注意すべし

而して氏が右抄略表否一般に自作の表に照し附言せる所によるに、人口稠密（五〇人以上の密度）なる諸本國は、日本を除けば凡て歐洲にあり、人口稀薄なる諸本國は、露を除けば凡て歐洲以外に

あり、露國はその領土大なるよりするも、又その人口密度小なるよりするも、國本の基調亞細亞的なりとせり。³⁾ 看る可し幾世紀の古きより結ばれたる地理及統計の舊縁は、今尙右一片の舉例によりても窺はるるを、されど統計は地學のため體たらずしてその用に過ぎず、一旦統計學の本領に立還れば別に考ふる所なき能はず。

四

京都府は「地勢上山城盆地及丹波高原の兩部に分たれ、前者は山城の中央より西部に延び、桂川、宇治川、木津川等の諸川之を貫流して、地味肥沃、之に屬する市郡の人口密度概して高く、府平均（二方軒三三六人）を凌駕するもの多きに對し、後者は丹波、丹後の山地より成り、交通の便十分備はらず、之に屬する諸郡の密度は著しく低く、全國平均（同一六九人）に達せざるもの尠からず、」（管内丈にて舊國別に分ち考察すれば、山城は同九八〇人、丹後は同一七三人、丹波は同一〇一人たり）とは「昭和五年國勢調査報告第四卷府縣編京都府」中「結果の概要」（四頁）に説く所なり、こは一の現地方行政區劃内に於てさへも、地を更に細別して察すれば、人口密度頗る不齊を極むるの大旨を道破し得たりとすべきと共に、右不齊の原因解釋を試み、その間地勢を重視するの一方に偏せるの一例視し得べきに似たり、前項に附言せる如く「統計學の本領に立還」るの趣旨を、右原因観に推及ぼして考ふるときは、右の如き地勢偏重觀のみに甘んじ得べきや疑なき能はず。

人口の粗密又は土着の聚散區々たるに就き、之に共作すと認め得べき諸條件は、學者により種

3) Cf. R. Reinhard, Weltwirtschaftliche u. Politische Erdkunde, 6, A. 1929, SS. 237-239.

々研究されたる所なり、此點に關し概説を試みたる A. Hesse の所説を先づ引かんか、重要な幾多の新問題は、人口密度の諸因子如何の問題に付喚起せらる、こは一部は自然的なり、海洋に對し又は大陸内部に於ける國土の地位、高度、水の富、溫度及雨量並にその分布、土質の質及地下の富は然り、次に人種及國民的特質を擧ぐべし、是等と結成さるべき種々の經濟的社會的諸元素あり、特に生産の種類及烈度、土地所有權の狀況、經營及企業形態、生計、風俗習慣に及ぼす開化的諸影響、最後に諸立法政策を擧ぐべしとせり、言抽象に過ぐるの嫌ありとすべきも、進みて思索を凝らすのヒントは右所説中より摘拔し得べし、果せる哉、長く伯林大學統計學の一教授として異彩を放ちたる Ballod ⁵⁾、右の如き概括的見解に立脚しつつ、吾人にとり興味深き一言明を授けたり、即ち曰く「一般に議し得べし、一方糶に付八〇乃至一〇〇人の人口たらば、自國土産によるべき給養尙可能なり、尠くともそは歐洲にて通例なりと、土地法外に肥沃たり、且つ菜食營養を主とせるもの（支那に於て）にありては、主要食料の輸入を外國に待たずして、二〇〇乃至三〇〇人の人口密度を見る、歐洲内英蘭及稠密に土着されたる和蘭、西獨逸、瑞士に互る經濟地域にては、一方糶に付二百人以上の密度を示すも、その食料需用の約三分の二丈けは、外國よりの輸入に待つ」と吾人も亦後段に至り同様なる視野に立ち、聊か本邦人口事情を検討せんと言ふ欲する者なり、されどその以前に尙一般的説明を挿むを以て無用と考へず、請ふ項を改めて説かん。

4) Cf. Hesse, Art. „Bevölkerung“ im Wörterbuch v. Elster. 3. A. I. Bd. S. 473.
5) Cf. Ballod, Grundriss d. St. SS. 28, 29.

五

古文明國が農國たること今日より甚しかりし當時にありては、自然の諸條件に人口粗密の原因を求めしや明かなり、現に土地の肥瘠又は生産力に關係ある特殊自然的因子により、人口密度に及ぼす影響を示さんとはい、種々の方面より試みられたる所なり、同様に又同じ攻究法が農業殖民地として土着されたる新國に起る所以も明かなり、此點に付材料は古きの嫌ありと雖も、かかる考究の一例を示すの趣旨に本づき、脚註に引ける Schnapper-Arndt が北米合衆國に就き、諸氣候條件と人口察度との關係に關する數總括として引ける所を借らんか、一八八〇年の米國センサス(知名の經濟學者 F. A. Walker 主宰)報告中「人口分布に及ぼす諸自然相の影響」編に於て先づ(い)北米人口地的分布と年平均温度とを比較せる所次の如し。

華 氏	方料ニ付人口	華 氏	方料ニ付人口
四〇度以下	〇・八	六〇―六五度	四・八
四〇―四五度	三・二	六五―七〇	四・七
四五―五〇	七・八	七〇―七五	〇・五
五〇―五五	一一・六	七五度以上	〇・四
五五―六〇	八・八		

C. Wright はその後繰返されたるセンサス材料に本づき、同一題目に就き略説せり、生活及産業活動の幾多事情は氣温により左右せらる、北米合衆國(アラスカを含まず)の年平均氣温は華氏五三度なり、最大の人口密度は豫期され得べきが如く、平均温度四五及五〇度に互る諸地方にあり、

6) Cf. Schnapper Arndt, Sozialstatistik. S. 93 f.; Bortkiewicz, Bevölkerungswesen. S. 13; Conrad, Statistik. I. Tl. 5. A. S. 81.

(前表の示す所と異なるを注意すべし) 此氣温帶の上又は下に向ふに従ひ人口密度急減すること、三〇乃至五〇吋の平均雨量以外に於て急減すると異なるなし、國內全人口の五分の三以上は、平均温度四五度より低からず五五度より高からざる地方に住む、住民の三分の一未満は五五度以上の氣候下に住む、温度平均七十度に達する地にては、人口の百二十五分の一丈け住めり、七〇度以上の年平均温度下に住める人員は、餘りに稀少にして齒牙にかくるに足らず、是等の事實は米人が自國領内に於てさへ、熱帶氣候に觸るるを好まざることを示すと。

(ろ)次に降水量と人口分布とを組合せたる結果として、Schrapper-Arndt の引ける所次の如し

降水量(耗)	方籽ニ付人口	降水量(耗)	方籽ニ付人口
二五四以下	〇・三一	一〇一六一一二七〇	二二・八
二五四 一五〇八	〇・六九	一二七〇一五二四	九・七
五〇八 一七六二	三・一三	一五二四一七七八	七
七六二一〇二六	一六・六	一七七八以上	一・五八

従ひて最大密度は雨量七六二乃至一、二七〇耗(即ち三〇―五〇吋)なる諸地方(試みに之を本邦降水量分布に照すこととし、第五十一回帝國統計年鑑一四及一五頁を窺ふに、昭和六年中測候所朝鮮の中江鎮七七七・一 雄基七七九・九 函館一、二五三・七 東山道追分一、二七六・六 岡山一、二八二・〇。而して小降水量地としては大連五〇三・八 長春五二六・三 營口五九一・一。大降水量地としてパラオ三、四九七・九 八丈島四、一六六・〇たり)に存するを見るべくこは歐洲にその例を求むれば、民顯(八〇五)及北瑞士(一一五〇)の降水量と略等し。

同題目に就き C. Wright 説く所によるに、平均年降水量に照せる人口の地的分布は、民衆が

7) Cf. Wright, Outline of Practical Sociology, p. 31; Towne, Social Problems, p. 23.

その地方雨量により作物の豊穰を保證せしむべき耕地を搜しつつ、聚落せんとするの傾向を指示するのみならず、一般衛生に關する諸條件を指示す、米合衆國の年平均雨量は二九・六吋なり、されど諸地方の相違は虞らくは零より一二五吋に及ぶ、人口分布を諸地方に於ける年雨量と結付けて測るに、興味ある數點は調査されたる諸地方住民數につきてのみならず、人口密度につきても察取せらる、即ち合衆國人口中四分の三にも及ぶべき大分合は、年雨量三〇乃至五〇吋なる諸地方に住む、雨量がその度合以外に増し又は減するに従ひ、人口は急減す、平均雨量三〇乃至四〇吋なる諸地方人口密度は、方哩に付き五〇・一人にして、そは急増しつつあり、四〇乃至五〇吋なる諸地方にては密度方哩に付七〇人たり、年雨量五〇乃至六〇吋なる諸地方にありては、人口密度方哩に付三一人たり、而して西部の乾燥地域（國土全面積の五分の二）にして年雨量二〇吋以下たる處にありては、住める人口約三%のみ、土地の大部分は大經費を要し又困難なる大灌漑事業によるに非れば、可耕たらざればなり。⁸⁾

降水量に關聯し特に米國の地勢に照し興味多く覺ゆるは、河川の流域即ち排水盆地 Drainage Basin による人口分布なり、夫れ政治的諸境界は必ずしも、凡て同一自然事情の下に住むべき一民衆群により徑界せらるることなし、そは本邦にても例令ば利根及淀の流域が、府縣市郡別境界と異れると趣を同じくす、かくて人口の自然的諸群に關する一層正しき一觀念は、夫等諸群が米に於ける自然の三大排水盆地、即ち The Atlantic Slope, The Great Basin 及 The Pacific Slope

8) Cf. Wright, op. cit. pp. 30, 31; Towne, op. cit. pp. 22, 23.

内に、如何に分布せらるるかを考ふることにより之を收め得べし、就中最初の大區劃即ち一次的名稱としての大西洋區には、從區分として新英蘭沿海區、中部沿大西洋區、南部沿大西洋區、大湖已及沿墨西哥灣區あり、第二の大盆地にはその細分としての The Great Salt Lake 及を The Humboldt River 有す、太平洋盆地は二次的には The Colorado River, The Sacramento River, The Klamath River 及 The Columbia River 並にその諸大支流より成る、一九一〇年に至る四回センサスの結果に本づき、是等盆地に分布されたる全人口の百分比は次の如し。

地 區	一八七〇	一八八〇	一八九〇	一九〇〇
太平洋區	九七・八	九七・一	九六・二	九五・七
新英蘭沿海區	八・五	七・六	七・二	七・一
中部沿大西洋區	二〇・八	一九・二	一八・三	一八・一
南部沿大西洋區	七・三	七・四	六・八	六・九
大湖 區	一一・〇	一〇・七	一一・二	九・七
沿墨西哥灣區	五〇・二	五二・二	五二・七	五三・四
大 盆 地	〇・三	〇・四	〇・四	〇・五
太平洋區	一・九	二・五	三・四	三・八

住民の九五%以上は大西洋に排水さるる地域に住み、人口の二分の一以上は墨西哥灣に排水さるる地方に住み、就中その五分の四(國土全人口の約四四%)は Mississippi 河の排水盆地に聚落せり、全人口の二百分の一丈けが大盆地に住み、約三三分の一丈け太平洋面に住む。その外前表は又米

人中直接大西洋に排水さるる地方に住む者の割合、間断なく低減の傾向を示すに、墨西哥灣に排水さるる地方は比較的益々住民を増せることを示す、若し夫れ太平洋面住民の割合上前表に窺はるるが如き増進の趨勢が、引續きその歩調を高めつつあるべきは、米國輓近の國勢に鑑みて大凡そ推測され得べき所なるも、そは本世紀に入りてより以後の諸センサスに徴して断すべし。

(は)右の題目に牽聯して直ちに注目を惹くべきは、土地の高低と人口地的分布との關係如何の問題なり、蓋し特に米國に於ける初期土着は海岸に沿ひて行はれ、その結果土着地の高度海拔數呎を出でざりしも、その後人口の動きは西漸的に進めるを以て、一層高き地方にも人烟増したればなり、而してかく土地高低別人口分布を問ふは、社會學的にも重視さるべき所なり、そは個人の經驗上居を高燥の地に選ぶや、低濕の陋巷に之を構ふるやにより、健康及勤怠の氣分に影響する所大なるによりて、推して知るべし。今前例を襲ひ此關係に就きて、先づ Schnapper-Arndt の引ける所を借れば次表の如し。

呎	米	全人口中%(イ)
一〇〇以下	三〇・五以下	一九・五
五〇〇	三〇・五— 一五二・四	一〇
一、〇〇〇	一五二・四— 三〇四・八	一四・二
一、五〇〇	三〇四・八— 四五七・二	八・六
二、〇〇〇	四五七・二— 六〇九・六	四・三
三、〇〇〇	六〇九・六— 九一四・四	〇・九

9) Cf. Wright, op. cit. pp. 27, 28; Towne, op. cit., p. 22.

四、〇〇〇	九一四・四一―二一九・二	〇・二
五、〇〇〇	一二一九・二―一五二四	〇・二
六、〇〇〇	一五二四 ― 一八二八・八	〇・五
七、〇〇〇	一八二八・八―二一三三・六	〇・二
八、〇〇〇	二一三三・六―二四三八・四	〇・一
九、〇〇〇	二四三八・四―二七四三・二	〇・二
一〇、〇〇〇	二七四三・二―三〇四八	〇・四
一〇、〇〇〇以上	三〇四八以上	〇・四

備考 (イ)原書には「方針ニ付人口」とあるも、適當と信ずる所によりかく改めし事を明記す。

右の題目に付 Towne がその後の材料をも取入れつつ説ける所によるに、人口移動の趨勢は今尙高度一層上れる諸地方に向ひて進むにあり、現在大多數人口は海拔百乃至千呎の高度にその生存を營めり、されど全人口中六分の一は、海拔百呎以下なる沿海地並に南部の沼地及平地に住めるを見る、高度千呎以上に上れば人口は急に減す、その地は益々荒寥不毛なればなり、かかる遞減の實勢は五又は六千呎の高度に達する迄續けらる、されどこの高度を超ゆれば輕微の増加を見る、是等高嶽の諸末隅に採鑛の作業行はるるがためなり、而も亦五千呎の高度以上に發見さるるは、全人口の百分の一に過ぎずとせり。¹⁰⁾

(ニ)種々競合して一地方又は一共同體の發達を左右すべき諸因子は極めて複雑なり、されど一地方に於ける安樂及健康の一重要尺度は、氣中の相對的濕度なり、濕度とは空氣を飽和するに必要なる濕潤量と、その氣中現實に含まるる濕氣量との比なり、この濕度は溫度に應じて變ず、温

10) Cf. Towne, op. cit. p. 22; Wright, op. cit. p. 29.

度高ければ氣中に保ち得べき濕氣の量も愈々大なり、空氣は諸種の疾病特に肺病、咽喉病に大影響を有するを以て、平均相對濕度に應照せる人口分布の問題は重要となる。以上は濕度の影響に關する Wright の略觀なるか、氏がその後を承け北米の濕度分布に就き大觀せる所、確實の記事としては兎も角、新觀想の參考に供するの値多しと考ふるを以て、その儘紹介せんか、太洋たると灣又は湖たるを問はず、空氣は岸に沿へる諸地方に於て、濕氣を負はさること多し、東 Appalachian 山諸地方と西 Rocky 連山地方の大部分とは、氣中に濕氣を帶ぶること多し、Appalachian 山の東 Piedmont 地方及 Mississippi 流域の北部にては一層尠し、而して原野及大平原にては一層減少し、Utah, Nevada 南 Arizona 及南東 California にては最小量に達す、之に反し西北部 Oregon 州の沿海地及東部 Washington 州の沿海地にては、之を領土内地の何處に比するも氣中に濕氣を帶ぶること一層多し、濕度は毫も雨量とその比を同じくすることなし、北湖水地方を通じ氣中には洲 Washington に見るが如く濕氣多きも、降雨は遙かに尠し、南加州の沿岸は大西洋岸同様氣中に濕氣を含むも雨は乏し。而して殆んど全人口は含濕力満量の六五乃至七五%を含める氣中に住めり、別言すれば空氣は三分の二乃至四分の三飽和せらる、一八九〇年（第十二回即ち一九〇〇年の報告中、人口分布と濕度との關係を叙せず）人口六二二、六二二、二五〇人中五七、〇三六千人は是等條件下に發見されたり、一層乾燥せる氣中に住める人員は比較的に微々たり、その數一八九〇年に二百萬未滿たりき、濕氣多き氣界内にては、大部分の人員は灣の沿岸並に Washington

及 Oregon の諸沿岸に撒かるるを見る、又最も迅速なる増加は右度盛の頂及底に發見されしと共に、特に割合に乾ける地方にありても、前世紀末に至る二旬年において、甲を換ふる毎に人口殆んど二倍したり、諸本源因子により惠まらることなき大地域も、輓近産業時代の特色たる企業經營又技術により、漸次埋合はさるることを示すものたり。¹¹⁾

六

十三州の外來者^{ヨーロッパ}を糾合し、獨立して一國を西半球に築き得たる約百五十年前の北米合衆國は現代に至りては經濟否金儲け法發展の諸階梯を、尨大なる一疆域内に「合衆」し、その間アルトとバスとを合奏せしむるの面影なきにしも非ず、現代化せる右米國事情を人口粗密の事相に訴へて省慮するに、賢明なる Wright が前項末尾の立説をなせるや、世の成行を夙にその萌芽期に洞察せるものなるを想はしめずんば非ず、以下その經過を少しく尋ねんと欲す。

米國人がその研究の出發點として採擇せるが如き前記諸條件は、殆んど皆一地區の豊凶に、差等の大部分を生ましむべき先驅條件なり、従ひてその研究上少くともその主とせる所は、豊凶と密度との關係を發見するにあり、かくて前記諸條件は人口密度の一次原因なりと考へしによるものなり、従ひて例令ば前にも引ける一八八〇年の米國センサス報告中明言せり、「一國の繁榮は雨量により大に左右せらる、蓋し原産業即ち農業の収益能力により、結局その他一切の産業はその盛衰を決せらるべきも、その収益能力は濕潤と直接の關係あればなり」と、此主張に窺はるるが如く土地の肥瘠と人口密度との間、因果の密接關係何處にか存すべしとせば、そは特に新土着

11) Cf. Wright, op. cit. pp. 31, 32.

の國にては明かに示現さるべき筈なり。されどかく限られたる範圍内にてその關係を舉證せんとする際にても、既に幾多の困難横はる、即ち處女地的面影を保つこと今尙夥しき米合衆國につき研究するも、此點につき共作し交互に交叉すべき幾多の原因を問ふの要あるべし、例令は最低地は人口特に稠密なりとするも、之につきては前にも一言せる如く、その地が沿岸諸地方たり、最も早く土着されたりとの歴史的事實主たる作用をなせり、新開地歳を重ねること多きに從ひて事柄は愈々複雑となり、可能的豊凶てふ因子の作用愈々輕微なるに至る、されば一般論として吾人は謂ひ得べし、可能的豊穰現實となるがためには人の奮勵を要すと、別言せんか此點に付人口増殖の主原因たるものは、寧ろ體力、勤勉及穎智に存すべし、されば Seligman も説きたり、人口の密度は外界環境に依存するのみならず、その環境に處し人力を加へて遂げらるべき利用により左右せらる、河川排水、高低及乾濕に依存せるものとしての人口密度分布は、米センサスの諸表中囑目すべき役割を演ずる所なれど、そは諸自然元素に累はさるるものとして茲には之を看過して可なり、されど人の元機はその環境の改善に努め、かくて經濟進歩を促すの因として益々重きを加ふと、¹²⁾尤も現世相の「易」變に眼界を擴げ來れば、か計り一方にのみ説き難きものも存するが如し、別に又「桃花流水杳然去、別有天地非人間」(李白)の一句に學ぶべきものあるを想ふも、こは疑として後段に留保しおきつつ、茲に挿説し度卑見あり、萬山及急流に富める我邦は、地勢上必ずしも農業の天國視すべからざるも、古くより勤又儉を養ひ來りし邦人の素質は、人口比較上之をして世界有數の稠密國たらしめたりとするは是れ。(つゞく)

12) Cf. Seligman, Principles of Ec. 9. ed. p. 50.